

## Contents

- 02 目次  
プロローグ Vol. 28
- 04 特集 内陸アジア  
彩り際立つフロンティア
  - 08 出稼ぎではなく、自らビジネスを立ち上げる タジキスタン
  - 10 ふたたび種子の生産地へ キルギス
  - 12 異国で咲いた友情の花 アゼルバイジャン
  - 14 発展とともに税制も近代化へ モンゴル
  - 16 日本での留学経験から教育改革を推進 ウズベキスタン
  - 18 お皿を変えて、健康的なおもてなしを タジキスタン
  - 20 日本のブランドとともに 世界品質のもの作りへ キルギス
  - 22 遠くて近い国々の魅力  
JICAスタッフが語る内陸アジア
- 24 JICA海外協力隊がゆく Vol. 27  
キルギス
- 26 世界につながる教室⑭  
授業でSDGsを学ぶ
- 28 地球ギャラリー Vol.149 ラオス人民民主共和国  
写真・文●堀内 孝(写真家)  
戦禍の記憶と多様な文化
- 34 教えて! 外務省  
知っておきたい国際協力⑳
- 36 JICAイベントカレンダー
- 38 読者の声、プレゼントほか
- 39 JICA PRESS
- 40 わたしが見つけたSDGs Vol.29

\*掲載されている情報等は取材当時のものです。

### 【お詫びと訂正】

本誌2021年1月号において以下の誤りがありました。  
訂正いたします。

2ページ  
誤：横浜県横浜市  
正：神奈川県横浜市  
読者のみなさま、ならびに関係者各位にご迷惑をおかけしたことを謹んでお詫び申し上げます。



信頼で世界をつなぐ  
Leading the world with trust



日本との交流が増えている内陸アジアの国々。文化や言語が多様性に富み、親日家も多い。

## プロローグ Vol.28

# ウズベキスタンの 人とサッカー

文●柴村直弥

真つ白な街並み——2012年1月某日。タシケント国際空港からチームバスでホテルに向かう際に窓から見た景色だ。初めて見たウズベキスタンが今もまぶたに焼き付いている。FCパフタコール・タシケントに所属するための渡航だった。同チームはウズベキスタン国内で最も優勝回数が多くACL\*の常連でもあり、アジアのサッカー強豪クラブである。

当初は雪に包まれていたタシケントも、春が近づくにつれて、徐々にその美しい姿を見せてきた。滞在していたウズベキスタンホテルの目の前には英雄アムールティムール像がそびえ立ち、日本人が中心となって建設したナボイ劇場や、神秘的なモスクもいくつもあつた。

ウズベキスタンで初めて一人で乗ったタクシーで、運転手さんからこう言われた——「FCパフタコールのシバムラだろ?」応援しているから頑張つて」。降りる際に料金を払おうとすると、かたくなに拒み、「今日はいいよ。頑張つてな!」とタクシー代を無料にしてくれた。

街に出ればいたるところで現地の方々から声をかけていただき、好意的に応援してくれた。試合に負けた翌日は、乗ったタクシーの運転手さんに叱咤激励されたこともあつたが、それも応援してくれているからこそ。

ウズベキスタンリーグでプレーする初めての日本人選手ということもあり、少なからず責任とプレッシャーも感じていたが、街の人々の温かい応援が力になった。日本大使館やJICA職員、青年海外協力隊など、試合には多くの在留邦人の方々も応援に来てくれたほか、日本からブラハラまで応援に駆けつけてくれたサポーターもいた。2年間プレーしてポーランドのクラブへ移籍する際には、いくつかのクラブから「また日本人選手を紹介してほしい」と言われ、次の二人目の日本人選手(佐藤 稜選手)につながることもできたのは、現地のウズベキスタンの人や在留邦人の方々の応援とサポートのおかげである。

先人の日本人が建設したナボイ劇場が1966年の地震の際に



イラスト●中村知史

多くのウズベキスタン人の命を救ったという。そうした歴史も、現地の方々から日本人に対して好意的である要因だろう。そして、私もその恩恵を受けた。

チームメイトのウズベキスタン人選手は、日本語を学び、私に「コンニチハ、ゲンキデスカ?」「アリガトウ」などと話しかけてくることも頻繁にあつた。パフタコールでチームメイトだったウズベキスタン代表GKのティムール・ジュラエフは、私のことを「キョウダイ」と呼んで仲良くしてくれた。

2年間現地に住んで仕事やプライベートをともにしてきた私のウズベキスタン人に対する印象は、温和で思いやりがあるということだ。日本人に比べればルーズな部分もあるが、根は優しい。他の国のチームへ移籍してからも2度ほどウズベキスタンに行った。当時住んでいたホテルのスタッフは私のことを覚えていてサービスしてくれ、現地の友人知人も歓迎してくれた。

ウズベキスタンは今後も訪れたい国であるし、2年の間に現地に遊びに来てくれた家族や友人知人も、みんなまた来たいと言ってくれていた。

2015年に広島で行われた平和祈念国際ユースサッカー大会へウズベキスタンU-17(17歳以下)代表チームを招き、19年にはヴァンフォーレ甲府U-16がウズベキスタンへ遠征する際もサポートさせていただいた。今後も両国の懸け橋となることを行い、日本とウズベキスタンに少しでも恩返ししていければと思う。

\* AFC Champions Leagueの略称。アジアNO.1のクラブを決める権威ある大会のこと。

柴村直弥(しばむら・なおや)

1982年、広島市生まれ。広島県立広島皆実高校2年時に全国高校総体で優勝。中央大学では中村憲剛らとプレーし、アビスパ福岡でJリーグデビュー。徳島ヴォルティスでは主将を務め、2011年にラトビアのFKヴェツピルスに移籍。ラトビア1部リーグとラトビアカップで優勝し、国内2冠を達成する。ウズベキスタンのパフタコールではACLにも出場し、次いでポーランドでもプレーした後、当時J1のヴァンフォーレ甲府に移籍。現在はSHIBUYA CITY FCでプレーしつつ、DAZNのJリーグ解説、執筆、講演活動など多岐にわたって活動している。